

—セミ捕りの思い出—

(記 岡本)

小学生の頃、夏休みに山陰の田舎で従兄弟とともにセミ(蟬)捕りを楽しんだ。その頃関西にはアブラゼミ(油蟬)が多く、セミと言えばアブラゼミを意味した。最近山歩きを始めてから気付いたことは、関東で聞くセミの鳴き声の種類と関西のそれとに違いがあるように思えることである。温暖化が原因なのか、西のセミが東漸しているように感じている。

セミの雄は樹木の幹に留まって鳴いているので、どの樹木にセミが留まっているかは簡単に知れるが、木肌と同じような茶褐色をしているアブラゼミを見つけるには、ジーッと注意深く探す。先ず、樹木の幹の正面を凝視し、樹の端の線(空間と接している樹の端の線の部分)に瞳を凝らす。幹の正面に留まっておれば、セミの全体の姿が見える。樹の端の線におれば、横からの姿がシルエットのように見える。幹の正面と樹の端の線に瞳を凝らして樹木をゆっくり一周すれば、セミを発見できるはずだ。枝の部分にも留まっていることあるが、概ね幹にいる。



見つけたら、捕獲にかかる。王道は捕虫網で捕る(竿の長いものが良い)。セミが飛翔するのは、樹木から樹木への短距離を瞬間的に移動する際である。この飛翔するセミを捕るのは至難であり、自分も飛ぶセミを捕ったことはない。樹木に留まっているセミを捕虫網で捕らえるのだが、幹のセミに網を被せても、丸い幹と平らな輪っかの網との隙間から逃げられることが多い。運良くセミが網の房の方に飛んでくると、捕獲できる。捕虫網を使う場合には、隙間から逃げにくいように大型の網でなく、小型の網で輪っかを楕円形に曲げて使うと捕獲率が大きく上がる。トンボ(蜻蛉)捕りは大型の網、セミ捕りは小型で楕円形の網が適当である。

セミがクモ(蜘蛛)の巣に掛かっているのを見たことがあるでしょう。従兄弟達と一緒に「クモの巣に掛かったセミ」をみて編み出した「クモの巣輪っか」で遊んでいた。先ず、3m程の長い竹竿を求める。節の先の穴に、直径30cm程の円形に曲げた針金の両端を差し込んで輪っかを作る。金魚すくいの輪っかのように。その輪っかの部分にクモの巣を絡めるのだ。「クモの巣輪っか」を幹に留まっているセミの背中に軽く押し当てただけでセミを捕ることができる。

子供達が数人、グループを成してあちこちの家々の軒下や物置小屋に張っているクモの巣を探してガヤガヤと「クモの巣掃除」に廻るのも遊びである。輪っかの張りが一重だとネットが弱いので、二重、三重に張る必要がある。粘着力が弱くなったり破れると、クモの巣を探して補修する。この「クモの巣輪っか」にはこんなことも出来る。輪っかの根元の針金を80~90度曲げると、幹から張り出した枝の下側に留まっている、捕虫網では捕り難いセミを簡単に絡ませて捕獲できる。水平になった輪っかを上下させるだけである。枝の上側に留まっているセミも捕れる。

捕ったセミはどうか。飼っても樹液を与えることができず両三日で死んでしまうので、飼うことはせずに、生きたまま放ってしまう。セミからは残酷だと責められるかもしれないが、偶に遊び道具にしてしまうことがあった。足が6本もあるのだから、歩くのは速いだろうなどと冗談

を言いながら、翅をむしり取り地面を歩かせてみる。殆ど歩けないヨチヨチ状態のセミに徒競走させるのだ。

遊んだ後、幹に戻してやる。翌日セミがどうなっているか探してみても、多分鳥か何かの餌食になったのかどこにも見当たらない。また、飛ぶ鳥が水面を泳いだり潜ったりするのだから同じように飛ぶセミも泳ぐのではと考えた訳ではないが、池の水面に浮かべてみたりもした。翅を広げてバタつかせるが、翅が水面から離れることはなかったようだ。勿論、飛び立てない。セミの生態や体の機能とは無縁の地上歩行と水練をさせるとは、酷い扱いをしたものである。

(了)